

ひろば大代

NO. 200

大代公民館

二百号発行記念特集

大代町民を啓発する

「ひろば大代」二百号を祝して

前公民館長 田辺 孝

町づくりの一角を担って、遂に二百号まで、よくも維持継続されてきました。これもひとえに、公民館長・編集委員・公民館主事また、投稿なされた方々のなみなみならぬ大変なご苦労のたまものと深く敬意を表し、心から感謝申し上げます。

私も六年間「ひろば大代」の編集に当たってきました。

大代町に誇れることは、毎月発行される「ひろば大代」の公民館報にあると認識しております。

大代公民館が島根県優良公民館として県教育委員会から表彰されたのも、

これまで活動し継続してきた大代公民館報にあります。

「ひろば大代」に誌された記事は大代町の貴重な歴史であり歩みとなっております。

毎月毎月、町の動きや人の考えや見方が知らされています。お互いの心の中に示唆を受け収穫となつて生き続けてきたのではないのでしょうか。

この世の中で一番恐いのは、情報のない社会です。情報を知らされない社会は、想像も出来ない暗黒の世界へと住みつかせることとなります。

「ひろば大代」は、町民に情報を提供しているといえます。だから、これからも「ひろば大代」は私たちの広場と考え、守り育てていかななくてはなりません。あなたの学び（体験）の成果を投稿し、社会に還元して下さることを祈ります。

この「ひろば大代」が二十世紀の終りまで続けば二百四十六号となります。「ひろば大代」発行二百号を祝し、更に三百号へと続いて行くことを切望してやみません。

愛読者のために

「ひろば大代」二百号を祝して

元公民館主事 山根 哲

此の冬は厳しい寒さが続きますが、公民館関係の方々には、お元気にて御精勤の事と存じます。

此の度は「ひろば大代」発刊二百号に至りました由、おめでとうございます。故郷を離れて二十余年、「ひろば大代」はとても待たれて届くと、何はおき、夫婦で読ませていただきあれこれと噂しあつてなつかしんでおります。

原稿の取りまとめ、編集等大変でございますが、何卒これからも続けて発刊の程お願い申し上げます。

公民館の順調なる活動と、今後の御発展を心よりお祈り致します。

「ひろば大代」二百号到達へ

前公民館主事 松井 幸

館報発行の重要性は今更申し上げます

までもなく、公民館活動の原点であり大切な地域活動への呼びかけを果たして行くのではないでしょうか。

館長さんを始め、編集委員の方々、そして事務を担当された職員さん、夫々が絶ゆまざる努力の証として深く敬意を表します。

昭和六十年代に入り、大田市社会教育担当者は研修会議の冒頭に「世はニュー（新しい）メディア（媒体）時代に入った。吾々も之に対応出来る様な態勢造りを考えたい。」と情報化時代の宣言がありました。

私達の身辺はコンピュータ時代へと変わって行き光ファイバー、フックシミリなどの先端技術から家庭ではテレビを始めあらゆる電気器具が目覚ましい発達を遂げつつありました。

又町内では都市交流事業や、花一ぱい運動の展開、大江高山の登山道整備体育事業や文化事業など活発に行われ有線放送、印刷機器など次々と機能を発揮し、手軽に明るいニュースが届けられ頼もしい限りでした。

今月には太平洋戦争五十周年記念記録を発行の計画もされている様です。

あの泥沼の様な戦後から、今日の隆盛を誰が予想し得たでありましょうか。偉大な人の力強さを感じます。

間もなく二十一世紀に入ります。更に社会の総てが変化し複雑化して行くことが予想されます。

そして一方では益々高齢化する社会地域の課題も施策も多様化して来る事は必定と思われれます。

「ひろば大代」二百号を祝して

東京石見高山会々長 田中憲経

「ひろば大代」二百号発刊おめでとうございます。

昭和四十五年に創刊以来営々として休みなく発行され、町内の出来事や提言などを伝え続け、貴重な情報のアンテナ役を務めてこられたことに心から敬意を表したいと思えます。また故郷を離れ暮らしておられる多くの大代出身者からも愛読され、連帯の絆が広がっていることを考えると、その成果は計り知れないものがあります。

私は、小学校を卒業して進学のため家を離れて以来五十年の月日がたちました。仕事のため国内各地に転勤し、また外国へも四十数か国訪れました。

そのため何処に行ってもすぐに馴染れ、前からそこに住んでいるような気分になつてしまう癖がありますが、その私も心はいつも緑豊かな大代の町と結ばれています。大海を回遊している蛙も最後は生れ故郷の川に帰ってきます。風変わりな譬えですが、その蛙の気持ち分かるような気がするのです。

新聞に、一時帰国した宇宙飛行士の若田さんの言葉がのっていました。

「青いベールに包まれた地球は美しかった。生きている惑星と実感した。」若田さんは過かな宇宙を飛行しながら青い地球をわが「ふるさと」と感じていたのではないかと思います。

とりたての野菜のような、香り高いふるさとの暮らしを伝える情報宅急便「ひろば大代」そして「婦人会だより」私たち外海を回遊している出身者にとつて、郷里との連帯感を確認するために欠かせない役割りを果たしています。

体裁は一向に構いません。これからも掛け替えないふるさとの情報を送り続けてくださいますようお願いしてお祝いのお言葉をおわります。

「ひろば大代」二百号発刊によせて

関西高山会々長 市原 宗

この度「ひろば大代」が、第二百号発刊の運びとなりました事は、誠に御出たく、衷心よりお祝い申し上げます。

発刊二百回の長きに亘り、ひたすら「ひろば大代」に御尽力下さいました歴代編集委員の方々並びに関係者、大代町の皆々様に深甚なる敬意と感謝の意を申し述べたものであります。

私は「ひろば大代」を拝読いたしまして四年余りでありますが、その内容は何時も盛り沢山で、大代の折々の出来事や、あの人の人の様々な手記など、大変嬉しく又懐かしく読ませていただいております。

今後「ひろば大代」が三百号、五百号と回を重ねられ、地域社会の発展と

故郷と都市を結ぶ交流の掛け橋として益々貢献されますことを祈念いたしまして、お祝いのお言葉とさせていただきます。

二百号を祝して

上市 後藤マサエ

なんと二百号！本当におめでとございます。

ひろばの用紙の重さだけでも二、三キ口、いわんやその内容の豊かさといひ、広さは今や日本一だと思えます。

平成二年一三三号に島根県教育委員会より、優良公民館として表彰を受けておられるんですもの。

編集にあたって関係者の皆さん毎月ご苦労様でした。雨の日も風の日もあつたでしょうね。

こんなすばらしい大代に嫁して四十五年、女性としてこれからの人生を地域の活動に精いっぱい燃焼したいと思えます。

ひろばの前身「つどい六号」（昭和四十七年八月）に婦人会の会員数は二

百五十五名、平均年齢四十七才とあります。平成八年二月の会員数は百八十三名、平均年齢六十三才とずいぶん高齢化しました。

「ひろば」も年輪が一層密になり、この里でこの地域でしっかり根をふんばって下さることを信じます。

二百号発行に寄せて

公民館長 渡 吉正

公民館報の発行は昭和四十五年の「つどい」から始まりました。時の館長は原田秀興さん（浄土寺の先代住職）で、主事は上市の山根哲さん（愛知県豊田市在住）でした。

当時は未だガリ版刷りでしたので、発行回数も少なかったようです。

名称が「ひろば大代」に変わったのは、昭和五十五年六月発行の「十号」からです。それ以降は毎月発行するようになり、遂に節目の二百号に到達しました。

「継続は力なり」と言いますが、ここ

まで続いたことは歴代の館長・主事さん、そして編集委員の方々や原稿をお寄せ下さった多くの皆さんのお陰であると心から感謝申し上げます。

しかし毎月の発行は大変なことで、その作業（原稿依頼—ワープロ打ち—編集—校正—印刷—製冊—送付など）はその大方が主事の手には掛かるもので多忙を極めます。

私はこの二年間に二度も隔月発行を提唱しましたが、またしても寄り切られて、今は皆さんに引かれて善行寺参りの心境です。

他館発行のものは回数は少なくとも斬新で、簡潔で、スマートなものです。館報は回数が多ければよいと言うものではなく、町内外の情報はさることながら、より高い文化を謳う機関紙でなければなりません。

今後は次第に編集方法を改めて、形式のワンパターン化を脱して、できるだけ写真やイラストをとり入れた楽しい読み物にしたいと思っております。

どうぞ今後とも相変わらずのご支援を頂きまして、続けてご愛読下さいませよう宜しくお願い申し上げます。

発刊二百号に際して

編集委員 市原仁郎

大代公民館報「ひろば大代」の二百号記念おめでとうございます。この機会に提言を二つ、三つ……。

(1) 大代町内の自主的な情報紙としての役割について大きく貢献して来たのは事実であるが、社会教育の範囲を拡大して、自由な町民の声を掲載してはどうか。新聞で言う「声欄」の設置である。

(2) 以上の様な観点から農業に関する意見や記事がほしい。言わば実利に結び付く声である。

(3) 高齢化現象の進展に伴い「町づくり対策」が必要である。古い家屋は文化財であることを認識し、整備する必要がある。特に若者の考えを聞きたい。

二百号に思う

編集委員 森 信子

昭和二十八年に大代公民館創立、そして四十五年に第一号の「つどい」が

発行されてから二百号の「ひろば大代」が発行されることはとても喜ばしいことです。今まで続けてこられた先輩方に敬意を表します。

最近私は読書をする時間が作れなかったのですが、以前買い求めた佐藤慶女さんの本の「コマを思い出しました」一六十年代七十代はまだ若い」という目標をたてておられました。

「アイウエオ、明るく、生き生きと美しく、笑顔で、おもしろおかしく、カキクケコ、感謝の気持ち、協力者のおかげさま、苦勞を一つはかってでる健康で、公共のために奉仕する、」ということす。

大代町も高齢化してきましたが、皆さんも老いたと思わず、いつまでも若々しく頑張りたいものです。

二百号に寄せて

編集委員 長谷保孝

「ひろば大代」が今回で二百号を迎えます。皆さんは毎回楽しく読んでおられますか。身近な情報紙として重要

な役割を担っているこの館報が、二百号を迎えることは大変意義深いことで編集委員一同、皆様方のご協力に感謝いたしますとともに、より良いものにと決意を新たにいたしております。

現在は毎月開催する編集委員会、テーマや寄稿していただく方を決めていますが、何分小人数ですので考えにも限界があります。新鮮さという面でも少し工夫が必要な気がしています。

「ひろば大代」を作るのは皆さんです。いろいろなアイデアや意見をお寄せいただき、読者としてだけではなく「ひろば大代」を守り立ててくださることを願って止みません。

二百号に寄せて思うこと

編集委員 谷口 浩

大代町在住十二年、出雲出身者が町に思うこと。

一、高齢化が進んでいるとはいえ、何故公民館活動に若者が出てこないのか。

一、若者が全面に出て来た時に、何故年輩の人は気持ちを取り戻して理解

してやろうとはしないのか。

一、町全体の大きな問題に対して、何故一部の人だけで決めてしまうのか。

一、決まった事に対して、何故固執し続けるのだろうか。

一、大田市内で聞く話し、「大代町は比較的まとまっていますね。」

一、表面的には見た場合と内情が、何故違うのだろうか。

町の活性化を日々考えている人、日常の仕事に忙殺されている人、青春を満喫している人、それぞれの立場で、今自分に出来ることを考えてほしいと

雑感

主事 横田美恵子

遂に二百号の館報が発行されました。

これもひとえに、歴代の館長・主事さん、そして編集委員の方々、お手伝いいただき補助員さん、読んで下さっている皆様方のお陰であると思っております。

毎月の発行に至るまでの緊張感は大変なもので、その中でも時折り、ワー

プロの中に記憶させずに次の原稿を打

ってしまい、「これですべて終了」と

一安心して、次に印字しようとしても

記憶がなくて一瞬にして頭の中が真っ

白になった事も一度や二度ではありま

せん。でもそんな時、励みになるのが

読んで下さっている方々からの言葉です。「今月の館報はえかったでな」と

言われた時、「今月も間に合ってた良かった」と心から嬉しく思います。

これからも皆さんの情報紙としてご

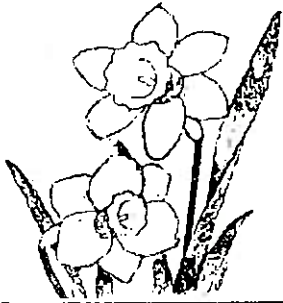
支援・ご寄稿をお願い致します。

市道川上線

通学バス開通



二月一日、待望の市道川上線整備完工に伴い、午前七時三分始発のバス発車前に現場川上地区同回転場付近市道で開通式を行い、式典は地元民百五十人が列席してテープカット、石見交通運転手さんへ花束贈呈のち、四十人が乗車して第一便を送り出した。



卒業を間近にひかえて

大代公民館

寒さも峠を越しだんだんと暖かさを
 感じるこの頃、今年も卒業シーズンを
 迎えました。

今年の第三中学校の卒業生は二十一
 名。その中で大代の卒業生は僅か六名
 です。小人数にもかかわらず、三中へ
 統合しても敬老会や都市交流会など、
 地元地域のために大きく貢献して頂き
 有難うございました。

九年間の義務教育を終えて巣立つ卒
 業の皆さんは次の方々です。

中学卒業おめでとうございます。

本郷 谷口 修君

八反田 原田亮美君

〃 原田亮寛君

本郷 日向高一君

川上 笠井優子さん

本郷 横 かおりさん

※これからそれぞれの高校で頑張って
 下さい。高山はいつでもあなた方を
 見守っています。

 * 三月の行事予定 *

◆1日(金) 福祉委員会3月定例会

◆3日(日) 婦人会総会

◆4日(月) JA 検診結果報告会

◆6日(水) 編集委員会

◆7日(木) 寿会会合

◆9日(土) 高齢者福祉を考える会

(大田市民会館於1時〜)

◆10日(日) 福祉弁当

◆10日(日) 消防訓練

◆15日(金) JA 減反会議夜7時半〜

◆16日(土) 第三中学校卒業式

◆19日(火) 大代幼稚園卒園式

大代小学校卒業式

◆22日(金) 連合自治会

◆24日(日) 大代小学校新築の為仮校

舎(旧大代中学校)に引っ越し

★——★おしらせ★——★

◎社協大代支部より

上市 谷口小夜子様から

香典返しに替えて金一封の御厚志を
 頂きました。厚く御礼申し上げます。

トラベル・エッセイ
「人生と旅」(2)

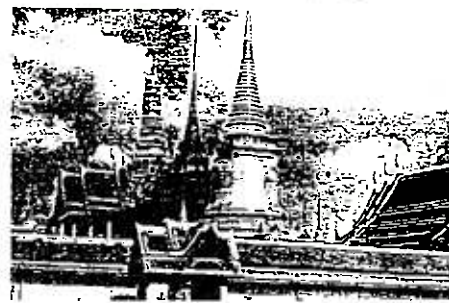
関西高山会会長 市原 宗
上市(本市原)

バンコクは、黄衣をまとった僧達の托鉢で夜が明ける。人々は僧へ食事や日用品を布施して自分の功德を積み、幸福をつくり出そうとするこの事であった。子供の頃から仏教信仰の尊さを教えられ、意識の中に仏教徒としての高い誇りが培われているのかも知れない。国教は仏教であり九十四パーセントが仏教徒であり、全ての青年男子は、仏教の戒律に従い生涯のうち少なくとも三カ月以上は授戒を求めることが守られ、国王とても例外ではないとの事であった。

バンコクでは、何と言っても王宮周辺は是非とも訪れなければいけない重要なところである。そこには王宮、ワット・ブラ・ケオ(エメラルド寺院)国立博物館と言った魅力あるところが多く存在している。私たちのバンコク旅は、カメラ片手にまずここ王宮周辺から始める事とした。

初めに訪れたのは、もちろん王宮である。タイ王室の公式の行事が行なわれる宮殿がある。王座の間、王家の館などタイの最高権威が誇示され、タイ芸術が結集され、壮麗絢爛たる文化にはひどく魅せられた。

王宮を一巡すると、王宮のすぐ近くにエメラルド寺院がある。寺院の門をくぐると、仁王立ちの獣面の守護神像群があり、黄金のパゴダ、本堂と続くのである。



格式の高いワット・ブラケオ



仏教の守護神、ヤック

本尊様は、高さ六十六センチの翡翠

の御仏像で、光を受けてブルーに輝くその荘厳さと美しさには唯々手を合わせるのみであった。仏様のお姿が、エメラルドのように光り輝いていることから、通称エメラルド寺院とも呼ばれており、現王朝の守護寺院であると同時に、人々が国の宝として尊敬と絶大な誇りを持っている寺院である。その構造・絵画・装飾は、タイ文化の豪華さと優美さの真髄であるものと考えるのである。

「暑い なんとも暑い。」南国特有の暑さである。気温が比較的良く、旅行者には最適と言われている十一月(二月(日本の冬期)でも、平均気温が31℃と言われているのであって、私たちが訪れた八月ともなれば、猛暑と言うより酷暑と言ったほうが良い。人間の体温を上回っているのだから、とてもたまらない。日本で用意した帽子では、暑くて用をなさないのので現地で帽子を買い求め、持ってきた帽子の上に被せた。ヤシの葉で二重底に編んだ簡単なものであったが、頭が涼しくて少々浮かばれた。

約十五分くらい歩いて、バンコク中

央駅のすぐそばのワット・トライミツト（黄金仏寺院）を訪れた。有名なのはこのお寺の高さ三メートル、重さ五トンの黄金仏である。この仏像は粘土で覆われていたので、誰もが石仏と考えていた。戦後、仏像を覆っていた粘土の一部が台風により崩れ落ち、金無垢の像が現れて、人々は一様に驚き以来純金の仏像として一躍有名となった。戦争中日本軍に持ち去られなかったため、粘土でしっかりと覆って石仏として一般には公開されていたのだと言う話である。

暑さのため少々疲れ気味となり、空腹感も手伝って、予約していたレストランに向かった。そこは、中央に舞台があり、それを囲むようにテーブル席があつて七百名ぐらいは収容できる大レストランである。食事はショーに合わせて二時間ぐらいで、食事の間いろいろなお菓子を繰り広げてくれる。お屋のせいかな民俗音楽の演奏・歌謡ショーなどが主で、冷房のよく効いたこのレストランは地元の人や観光客で満席であつた。外国人観光客のため、数か国語で解説してくれる心づかいに

は感心した。この地で、日本の歌謡曲加山雄三の『君といつまでも』の歌を聴くなんて思いもよらなかつた。

ホテルに帰って、チュラロンコン大学のM博士に電話をいれた。彼とは日本の大学で共に研究をしていた旧知の仲で、現在大学の免疫学教室で教鞭をとっている優秀な教授である。突然の電話で、彼はとてもおどろき懐かしさを頭に、是非大学に来るようにとの事であつたので早速タクシーで友人と共に大学を訪れた。よもやま話の後には自然と研究の話に移っていった。

彼の最も得意としている免疫学のことである。我々が想像していた以上に立派な彼の研究業績には感心した。多忙な彼と別れ、彼の紹介によりチュラロンコン大学付属病院の毒蛇研究所を訪れた。タイの毒蛇研究は世界一と言われ研究所内には、数千匹の毒蛇が飼育され血清と解毒剤の研究が行なわれていた。

夕刻からM夫妻と共にシアターレストランに行った。婦人とは初対面であつたが、とても明るく気立ての良い心配りの行き届いた人であつたので、

すぐと打ち解けあつた。日本留学時の思い出話やタイの習慣、風俗などの話題で、時の過ぎるのを忘れる程であつた。タイ古典舞踊をはじめ、タイ各地の民俗舞踊、剣術、タイ式ボクシングなど珍しいショーを見ながらの食事はひどく楽しく又感激ものであつた。「タイは微笑みの国です」と言つた彼女の言葉が何となく理解できるように思われた。きらびやかなタイ・シルクの衣装で演じられる古典舞踊は、もともと宮廷舞踊として伝承されてきた舞踊は民俗楽器のリズミカルな楽団演奏をバックに演じられ、その演奏される音楽はアユタヤ時代から伝えられていると言ふことであるから驚きだ。

アユタヤ時代は、約六百五十年前から四世紀以上も栄えたタイ民族第二王朝時代であつて西はヨーロッパ、東は中国、日本とも貿易を持ち隆盛を極め、山田長政など多くの日本人が暮らしたのもこのアユタヤ王朝時代であつた。

異国情緒豊かなタイの古典舞踊は、指の動きやバック音楽、楽器のリズムなどが共にマッチして、その美しさと芸術性にはとても感動した。